

博多小女郎波枕

作者 近松門左衛門

上之卷

船を出しやらば
一此歌松の採葉
巻六近江八景の
唄に出でたり
門司一文字にか
く豊前にて下關
と相對す
檜垣作一十四五
反の帆を張つた
檜垣船の廻船が
沖にて何か待て
る
うん達一故等
見えいろ一見え
ざるべし
なかばい一なき
故
心たまぎりや云
云一驚く事あれ

歌、船を出しやらば夜深に出しやれ。帆影見るさへ氣に懸る。長門の秋の夕暮は、歌に詠
むてふ門司が關、下の關共名に高き、西國一の大湊、北に朝鮮釜山海、西に長崎薩摩灣、
唐阿蘭陀の代物を、朝な夕なに引受て、千艘出れば入舟も、日に千貫目萬貫目、小判走
れば銀が飛ぶ、金色世界も斯やらん。沖に何まつ檜垣作、十四五端の廻船に、船頭水夫
は襦袍著て、足踏延す梶枕。四五人の乗衆共、櫓の上につಕ್ಕつ。そよと波音舟影に、
心を付る蚤取眼、物案じ顔も頼すいたる、中に頭の毛剃九右衛門、生れは長崎國訛、コ
リヤうん達、まだ市五郎、三藏が舟は見へいろ。心元なかばい、心たまぎりや夜ざとく
成て、身だまんじり共せない。首尾能らふば筑前さなへ此舟廻し、柳町のしやうく、て
い共請出いて、上方さなへつと走る。表の間借切に上唐人、船頭が名染、筑前迄乗せな

ばすぐ目が覺め
る海賊の癖
身だ云々身は
少しも臆ない
さな一あたり
しやうくいてい
しやうくいてい
しやらくの誤
か、しやらくは
遊女の異名
上唐人一惣七
仕果せ云々一
儲せにや往かぬ
船

けりやならぬといふ。仕おふせにや筑前へは行かぬ船。門出よかく。よか便聞ふばい。
 表の乗衆呼ぶでわたい、咄どもして紛らさん「あッ」と答へて平左衛門、呼に下るれば
 その跡は、鬼共組べき男共、編片取て敷かすやら、茶出しに唐茶摘み込。注出す色は薄け
 れど、頭を頭と敬ひし、禮義ぞ仲間の花香成。表の乗衆小町屋惣七、生得慇懃都育ち。
 呼れて櫓に割膝し、「船頭名染に押付ての便船、御訪ねなく共御挨拶申筈。無禮御免」と
 手を突けば、丸ア、堅い。同船致し、一ツ釜の食事食るは一門同然。サアお手上げ
 られ。此五人は我等が仲間、他事無ふ咄明す中、近付に成てお咄なされ。斯ふ申某は
 長崎者。九右衛門と申てそつと致るた唐商賣。是は同國彌平次と申仁、次は上方小倉屋
 傳右、難波屋仁左。其元呼に參つたは、阿波の徳島平左衛門と申て髪月代致さる。船中
 の事缺き、心置ずとお頼なされ。して其元は何處何方」駕我等も生國長崎。世倅の時分
 親に連れて生れ所を引越し京住る。父が名は小町屋惣七と申者。賣買の
 爲、筑前へは毎年の折上り。何方も船中平ぐはい御免。よいお近付もとめし」と、禮義
 付廻へば膝崩れ、詞直せば寢匍匐ひ。早千年の名染程、心解たる朝霜の、奥底もなく成に
 ける。九右衛門顔色打解て、「船中の淋しさ、物語程伽に成物はな。おん共が廿七の年、

平ぐわい一胡座
もん共一我等

なかばんーない
のである

いろーやち

いつかけー引か
けて呑むこと

赤鯛ー錆刀
くさー此方

かろわれー握か
れ
なかたんーなか
つたに

びたひらなかー
鉦半文

薩摩者と喧嘩した咄、嘘じやなかばん聞つしやれ。九月の七日九日は氏神殿の祭、本踊
いろ、唐子踊いろ、見事なことばん。本興善町といふ所で、石五器に一二杯、肝の末へ
諸白をいつかけた薩摩二才、肥満男で有たばん。諏方へ踊見がい行く行違ひに、中か赤鯛
の錆がくさの、おん共が脇腹さなへ當るが最期、引つまんで壁を腕摺ふと思ふて、小尻
を逆手にやつくるり。それはく見事な事で有たがのふ。他國者に投られては國へ歸つ
ても成敗。死ぬる命は何處でも一つ、と二尺八寸引拔た。コリヤンほたゆるな、と又引
擔いて投たがの。角の有溝石で、くさ頭の顛骨が粉微塵に打破れた。ヲ舟では破れたと
いふは忌々しい。頭の顛骨が走つたく。血が走いろ、涙が出るいろ。頭抱へてやとい
どにかろわれ、小宿さなへ往んだがの。今で思へば無造らしけに、其様にせでも大事な
かたん。上方衆は氣が良かけん、此様な事は有まい」と、仕形まじりの高咄、皆安閑と
聞居たる。「サア京のお客お咄なされ、次第々々に所望せん。上方は色處、定て深い譯が
ある。お咄あれ」と口々に、乗すれば乗て、駕さればく、親惣左衛門吟味つよく、京
大坂ではびたひらなか、我物で我儘ならず。毎年の筑前通ひ、幸に柳町の小女郎とは、
抑より互に逆り、是非當年は請出して、女房に持ると合點、持約束」と半分聞て、丸ア

仰るな、聞迄ない。我等も博多へ参る者、此一座五人が小女郎殿の身請の幫間、大臣くはつとおはずみ」と、毛剃が起て膝立れば、手下甲「よふく」身請の大臣様「手下乙「こりや誰が大臣ぞ」手下丙「小女郎様の大いじん」と、一座がはらりと取廻し、座興も過ればむつとして、

盤踞るか、但悔るか」と、心くるく喘たぐる、胸を押へて、盤踞るへんく、今朝から風引頭痛致す。跡の咄は後刻々々。何方も是に」と挨拶し、思ひ惱みつ立煩ひ、漸下へ這下るよ。九身請する程内證が暖かで、風引たとは何處やら足らぬ和郎そふな」と、

悪口苦口小倉口より、波押切て来る早舟、此舟目當の一文字、眞黒に成て漕付たり。九右衛門始め立騒ぎ、「ヤア三藏、市五郎、首尾はく」二人近年の拍子能く、荷物受取金渡し、彼方も機嫌此方も仕合。荷数手形に引合渡しませふ」と聞嬉しさ。九船頭起よ、

水夫も来い。荷物請取れ」手下「まつかせ」と、心も勇む虎の皮百五枚、仕合すれば氣の藥、海老出の人参五箱で卅斤、仕損するは手廻しの緞子七櫃二百本、船から舟へ寫の麝香四十臍。九「なんと遠見に見付られはせなんだか」「けも無い事はしや鳥網が

まつかせーよし
きた
緞子ー鈍に
移しー摸しにい
ひかく
けもないー些と
もない事云はし
やるなに紗をか
わりやうー唐織

十五箱、去ながら、むりやうの縷子が十二丸、世話入た漆七桶、運の強いは一昨日の夜の月影、照の能い鼈甲百斤、先斯仕濟し歸りました。天地の恵み明星程な珊瑚樹が

相仕―仲間
かきだつ―櫓垣
船の格子窓
ほたり込―ほう
りこむ
下人―惣七の下
男

窺へ―窺ひか

袈―袈にかく

八十粒、手形の表是迄渡しました。此一通は來夏舟の割符。迎舟にお出なされとの言傳と、渡せば取て押戴き、九、手柄高名、休み召され。二人の衆にも酒おませ」手下「お目出度い。お頭様、御褒美をしつかりと、御酒も祝ふて下されう」と、皆本船に乘移る。九右衛門相仕等招き寄せ、小聲に成て、「何れも見すや。荷物を舟へ積折柄、乗合の京の奴、かきだつより顔指出し、合點往かぬと思ふ頼付、生て置たら頼けた叩き、後日の難義見る様な。切殺しては大事の門出、血を見るが忌々しい。縊殺して海へほたり込。下人奴も有そふな。油斷するな」「まつかせ込んだ。皆の衆脱るな」「心得た」と、鉢巻襷袢褰け、腕骨試し力試し、合の舳際を小楯にて、時分を窺へ、「サア來い」と、櫓下るよも忍び足。所は沖津汐風の、外は一味の舟の中、聞人もなし見る人もなし。人は知らじと思ふこそ、結局身の上知らずなり。下人が叫くまっかせ聲。櫓の上へ躍上るを、追續いて彌半次、傳右衛門、二人が中に取り捲て、中に指上、「是わいな」と、投げ込波の、あはれや下人底の水屑と成にける。「サア一人は仕て遣た。惣七奴が見へぬ。探せく。コリアく爰に、傳馬込に」といふ聲に、惣七水棹追取て狂ひ出、「ヤア海賊奴等、様子一々見届けた。死ぬる共一人死なふか」と、そつほう滅法打立る。後へ廻つて市五郎、すきを窺ひ、

だんばらぼーど
んぶり

運は傳馬―運に
听、傳に天をか
く
いひき云々―之
より話は博多の
廓の中に移りた
り、此唄は松の
落葉の唐人踊に
出てたり
長崎の伊左衛門
―怒市を長崎の
色男と嘲る

身上―勸銀出し
て休む

攫付ば取て投げ、投られながら足首を掟と取、眞逆様にすでんどう。どうくと響く波

音に捲りかけ、大勢かよつてだんほらほ。邊りも知れぬ海の中、眞逆様に打込で、「サア

仕済した、目出度い」と笑ふ聲。惣七はつと心付、見れば傳馬の中々に、物音せば悪か

らん、と纜解て櫓を押し立て、悪魚毒蛇の口よりも、遁れ難き場を遁れ、一反計漕出々々、

「チ皆々骨折りく。惣七是からお禮申。此返報は重て」と、心急げばゑいさつさ。ゑ

いや運は傳馬に有。押や櫓腕の續く丈、命限りと。三重いひきにてく、すいちやゑんち

や、すはひすふいてう、ひいたらこはいみさいはんや、さんそ、うわうわうくく」禿ア、

置やく。なふ欲市殿、其拍子では踊られぬ。錢太鼓の三味線、知らずば知らぬと頭か

らいふたが能い。長崎の伊左衛門様とは違ふた物。もう踊らぬぞや」惣七それで藝が上

る物か。三味線引止む迄サアく踊りや」といひければ、禿なんほでも踊らぬ。三味線

止て、此方も石碓か跛引かしやれ」惣七なんじや跛引け、盲目と思ひ悔るな。目二ツ持

たおのれ等に、いで物見せん」と三味線振上、聲をあてどに追廻す。亭主奥田屋四郎左

衛門、臺所から立出、「こりや何じや。欲市たしなめ大人氣ない。禿共もあがいたら遣手

に告て叱らすぞ。ヤイ重之丞、今日は小女郎様の母御の十三年忌、追善の爲身上りして、

一角一歩取て
やちう
宰府一財布にか
く
小町屋一來うに
かく
心奥田一心置く
に掛けて遠慮す
る
つかうどーけん
どん

小女郎様は奥の間に、經念佛して御座るでないか。附て居る太夫様の親御の事、線香でも立ふと思ふ氣はなふて、盲目相手に何事じや」眞、否、私共二人錢太鼓稽古して居たりや、欲市の三味線で邪魔しやりんす」四郎、其錢太鼓が猶悪い。物の稽古も時が有。奥へ往て附て居よ。二人ながらとつとと往け」サア欲市、表の二階に宰府の源様が來て御座る。見廻ふたか」篋やつちや一角せしめん」と、人の巾著當にして、囉はぬ先の締括り、宰府の客へと取に行。百年經ねど衰へは、今身のう上に小町屋惣七、下の關の大難に、命一つを拾ひ得て、博多へこがれ著しかど、身に付物は手足より、外には何の當もなく、知邊の方へも身を恥て、訪音信は絶へしかど、小女郎が情忘られず、戀しき風の吹立る、柳町には來たれ共、金銀なければ肩すほり、おのれと心奥田屋の、門を覗いつ退て見つ、案じ佇み居る風情。内には乞食と尖り聲。「余り物は遣てしまふた。通りやく」とつかうどなり。惣、扱ははや物難ひと人目には見ゆるよな。成果たり仕なしたり。此風俗で小女郎に逢度いといふたり共聞入じ。聞入てから小女郎が恥。思ひ切た。顔見まひ」と、立歸る後より、「ヲ、待やく」と重之丞、「コレ今日は太夫様ンの心ざしの日に當り、施の一錢」と指出しながら、「ハテ此乞食はお絹布を著て居る」と、顔指覗いて、「ヤアお前は

御意なされ一仰
せられよ

京の物七様。なふ太夫様、惣七様の乞食に成てごんした」と、呼はればかい振て、逃るを、眞往なさぬ待んせ」と、帯に縋つて留むる間に、家内も驚き断出する。小女郎は表に走出、笠搔投て、「ほんに左様じゃ。嬉しや能ふ来て下んした。此有様は如何ぞいの」と、何の様子も聞ぬ先から泣涙。今コレ四郎左様、奥へ連れまして咄度ふ御座んす」四郎「如何にもく。お名染の物七様、御用あらば御意なされ」と、亭主が情に打連て、入より早く縄付。今戀し床しはいわひでも知れた二人が中。此お姿は親御様の御勘氣でも受ての事か。様子が無ふては叶はぬ筈。お前の心に此小女郎は、まだ傾城じやと思ふてか。此身は廓に居る連も、心は疾から女夫ぞや。肩裙結び手を引て、人の戸口に縋る共、交した詞違やせぬ。今日は母様の十三年の命日。お前に逢たは親達が、彼の世から手を取ての引合せ。女房まめに暮したかと、一口云ふことならぬか」と、眞實見ゆる涙の玉。男もハラ／＼聲顛ひ、惣小女郎息才にあつたの。一年振に顔を見て、よい姿も見せ、よい事も聞する事か、聞てたも。毎年の如く諸色を仕込で下る處、下の關にて海賊舟に乗合せ、家頼は眼前海へ沈めさせ、我命さへほう／＼の仕合にて此處迄延び、商賣の荷物衣類は其儘舟に棄置、肌に一錢貯へなければ、二度に二つの下著を賣て、今

さるぞ云々何れも舶来の反物
ちくら一唐と日本
の汐境は袖羅
申なれば爰はど
ちらへもつかぬ
事
一夜檢校一俄大
益
端せせり一小店
遊び

日迄の露の命を繋ぎしぞや。此度の下には受出し、女房に持んとの深き契約。其金銀も
人手に渡し、詞を違へ望みを叶へぬ我本意なさより、和女が恨みん心の不便さに、云譯
やら顔見にやら、見苦しき身も恥ず、爰へ来て面目もなき物語」と、涙に聲を曇らせり、
「能ふ打明て下んした。寶は涌物、お命さへあるなれば、私や嬉しう御座んする。私が
心でお前一人は如何なと成。おいとしや肌寒かる。お顔がたんと細つた」と、著ながら
上著ふはと著せ、抱締てこそ泣居たる。表に血氣の下男、「大臣様の御來臨」と鳴り喚く。
「少ヤレ人が来る此方へ」と、男の手を取身を寄て、奥の一間に入にける。客は過つる海賊
共、眞先立て毛剃九右衛門、彌平次、傳右、仁左、平左、市五、三藏、「サア御座れ」と、
引摺る雪駄の金にあかした衣装付。各さるぜ羅紗すためん、かるさい、らんけん、繻子
天鷲絨、下著上著も渡り物。頭は日本、胴は唐との襟界ひ、ちくら手くらの一夜檢校。
終に目馴ぬ出立ばへ、奥田屋に動き込、座敷に居流れ、毛剃が諸色受込で、差配らしけ
に勿躰顔。丸亭主薄々見知が有ふ。廊の縦横十文字、昨日迄端せせりした我々。俄分限
は見らると通。今日からは太夫狂。来る途すがら見て置た一文字屋の江口、丸屋の勝山、
同じ家の薄雲、油屋見さほ和泉屋おぐら、車屋の大磯、此六人を請出して、是に居らる

早ふ往て―四郎
左が使にいふ詞

無間鐘―此鐘を
撞けば死して無
間地獄に墮つれ
ども現世にては
富貴となる、(秋
葉閑語)

る人々の物言伽。明日迄待ぬ今日の中に首尾させい「是はきつい」と四郎左衛門、飛で出るを「九」ヤレ待てく。亭主が留守では興が無い。云付て呼に遣れ「四」畏た」と硯引寄せ書付て、呼にやる足走書。「早ふ往て来い。お吸物、大座敷も一つに爲い。子共泣すな。女房どもに薬服せ」九「ヤ何じや。花車が煩ふか。それ挾箱持て来い。油斷召されな。人參用ひて養生が第一。持合せた、はづもふ」と蓋押開き一包、一つ選の大人參、一斤余り投出し、「四郎左、子共は幾人有」四「娘が一人、男が二人御座ります」九「チ、よい子持。小さけれ共此珊瑚樹、對で秤目が八匁、二人の子に提さしやれ。お娘が著る物に有合せた緞子三本、縹子五本。此緋縮緬裏に能らふ」綿の代迄相添て、投出すほり出す、頂くに、亭主が腕ぞ草臥ける。四郎左衛門憐として、「お禮より先臆が潰ると。何時の間に此様な大分限者にお成なされた」と、問詰られて間似合詞、九「きついかく。江戸商間緩く、小夜の中山無間の鐘、撞當た福々長者。去ながら、此鐘撞には行法がむづかしい。長者經、辻寺に傳はる、縁起の目録聞せ度い」と打笑へば、亭主横手をはたと打、「有難いお經。我等も少とあやかる様に、其お經授け下され」と、せがみ立られ、「然らば聽聞仕れ」と、何やら知れぬ懷帳、殊勝らしけに取出し、吝い事の嘘八百、長

者經と擬へ、聲張上て讀にけり。

長者經

空耳潰し一聞か
心顔して相手に
せぬ
光は云々一方便
にて身を資金に
したり

無常一矢驢にて
無性にかく
晨朝一瞬、滅多
は滅已にかく、
大野の多き

入らざる一爲樂
にかく
奈良茶粥一儉約
の意

「そも此無間の鐘の濫傷を尋れば、天竺の大金持月蓋と名に高き、さつても吝嗇い長者有。佛是に示さん爲、朝なくの頭陀の行、はつちくも空耳潰し、うん共すん共いわれぬ佛の方便にて、光はさながら一歩小判の山吹色。金と見るより吝嗇長者、佛の箱を剥さんと、欲から入ル手の内を、釋迦の尿管に仕懸られ、惜や悲しや南無阿彌陀佛、此撞鐘を建立す。されば穢い長者が心、末世の今に留て、先初夜の鐘を撞く時は、諸行無常に惜やくと響くなり。後夜の鐘を撞く時は、是生滅法な事と響くなり。晨朝の響きは、生滅滅多に入用知れず、寂滅入らざる鐘の聲、一文吝みの百八煩惱、此鐘の音を聞人は、現世にては分限の金持、未來にては無間の釜入。斯る不思議の撞鐘を、疎に撞べからず。扱行法の次第といつば、絹も袖も著る事ならず、木綿蒲團も榮耀の至。荒孤引て起臥の、身は慣はしよ奈良茶粥、精進潔齋菜入らず、晝夜にたつた二度の節季は尻褰け、往來の中をちよこく走、ちよこくくく脱て、落て有物只置な。輒ても

節季一食糲と二つの意を持たせたり七ツ起一午前四時に起くしべ一萬すゑさせ云々一さしたち必ず乾かせとなり

取奥田一取置にかけて止めて仕舞はねばならぬ

見てや一見たやか

土を摺んで起るは七ツ起。質を取らずは金貸すな。欲し物は買ぬが徳。月夜に夜鍋はせぬが損。稼に追付貧はなし。芥子を干にも割木の焚様、必灰を取る事勿れ。棄る物は何にも無い。鍋の煤烟では細肩作り、しべのきれば痿痺の妙薬。水なき井戸は梯子の入物、鼠の尾迄錐の鞘。させ干せ傘。人に貸すな鯉魚節。播粉木、播鉢、砥石、石臼、藥研迄、目にこそ見へね貸す度に、減すに戻る例しはなし。扱其外は愛嬌交際、始末貯蓄、讀書算盤秤目の、上を見れば法圖がない。我より下を手本として、右の條々守るに於ては、微塵積て山と成、長者の金言疑なし。無間の鐘とは名計にて、現世も未來も背かねば、自然と榮る福德縁起、聽聞あれ」と語り。

四「否共應共申されぬ。世界中が此通に身持たら、私等が商賣は、取奥田屋」とぞ笑ひける。座敷の隔ては障子一重、彼方の騒ぎひしくくと小女郎が身に應へ、少ア、有處には有物かな。五人六人の太夫達請出そふ、何遣ろ彼遣ろ是遣ろと、金銀財寶は塵埃。父様や母様の貧な暮しを見た時も、能はぬ金が欲しいとは、夢程も思はずして、今日といふ今日、彼方の身請が浦山しく、私や金が欲う成ました。仕合の能い人を、妬みは道でなけれ共、何な男ぞ顔見てや」と、障子の透より指覗き、「ヤアありや私が近付。まさかの時は

近付云々―悪意
は内證にて今い
へば人が聞く

もめ―争ひ

心便こゝろだよりに成なりましよ、と力を付つてくれた人。金借かねかつて來きやせう」と、進すすみ出いづるを引ひ留どめ、翌あ、近ちか付かは内證ないしやう、人も聞き。女郎ぢやうぢやうの口くちから金貸かねかしてと、身みの恥はぢは思おもはずか。小こ、恥はぢを包つむも事ことに依よる。たつた今いまいふた事こと。來月らいげつは筑後ちくごの客きゃくが私わたしを請まね出すと、出口でぐちの佐渡屋さどやと薄約束うすやくそく。お前まへの下くだりを月つきよ星ほしよと待受まちうけたりや此様こんな首尾しゆび。人手にんずへ渡わたれば私わたしや生いては居ゐぬぞや。金借かねかつた迎返むかひかへせば恥はぢにもならぬ事こと。私次第わたくしじだいと振切ふりきれば、遣やるも涙行涙なみだゆくなみだ、隠かくして座敷ざしきへ練歩くわいあゆみ、毛剃けしが側そばへ坐すはれば、バツと衣きぬの香かの、四邊あたりの人ひとはうろくと、顔かほを見合みあはす荒男あらしやま、俄にわかに嗜たしなむ衣紋えもんつゝ付つ、鬼おにが花見はなみる風情かぜいなり。小こ、毛剃けし様さま久ひさしいな。私わたしや此方こなた様さまへ無心むしんに來きた。此方こなたに大おほきなもめが出來でて、急いそに身請みうけをして囉わらはねば成ならぬ首尾しゆびに成なつたれど、肝腎かんじんの物ものが無ない。かねぐの詞ことばも有あ。此方こなたの才覺調さいかくてうふ迄まで、私わたしが身請みうけの成程なるほど、金貸かねかして下くだんせ。頼たのむする」といひければ、丸まる日本にっぽん一の粹すみ様さま。金貸かねかして下くだんせとはいひ憎にくい事こと。二言にごんと聞きぬ。お前まへの用もちなら千兩せんりやうでも萬兩まんりやうでも。コリヤ亭主ていしゆ、小女郎いづしやう様さまも一所いっしょに身請みうけ行ゆきたい處ところへ遣やります。金かねは毛剃けしが飲のみ込んだ。女郎ぢやうぢやう方かたの見みゆる内うち、小女郎ぢやうぢやう様さま借かりました。飲のみや歌うたへ」と騒立さわだつ。小こ、ア、待またんせく。あの障子しやうじの彼方あちらに、今云いまいふた大事だいじの男おとこが來きて居ゐります。連つれて來きて禮れいいはせます程ほどに、毛剃けし様さま詞違ことばちがへて下くださんなる」丸まる男おとこ冥利みやうり商あきなひ冥利みやうり虚言うそごころ御座ごぞうらぬ。お供ともなさ

門から云々門
から入来る遊女
をよりどりする
お敵云々サー
相手が出来たと陽
氣になる

おんと一廻當、
おだやか
出るも云々一廻
七の態

れ」の詞にいそく立歸る。幫問「太夫様、お出」と呼はる聲。門から色の擷取、勝山、江口、大磯に、寄せ来る波の大騒ぎ。座敷に一杯入込んで、太夫、薄雲さん見さほ様、小倉さん、三人はお跡から「手下」そりやこそお敵」と色めいて、毛剃が連共現を抜し、顔に餘念はなかりけり。九右衛門聲懸け、「コレく亭主、爰にはちつと用が有。妓様方口の座敷へ。跡から見ゆる太夫方も爰へは無用」四「おつとこなたへ來給へ」と、亭主に連て立廻る、女郎も田舎はおんと成。出るも如何出ぬも如何、小女郎に引れて惣七は、障子押明立出る、顔と顔互に見合せ、鴛、ヤア小女郎が名染の男、今思ひ出した其方が事な。ヲ、おのれ等に逢たかつた。ヤア人は無いが、此奴等は下の關の」跡云せじと毛剃が連共、大聲上、「頼桁聞すな打殺せ」と、蹴立る盃爛鍋の、轉て疊にたぶくく。「濡れから起つた喧嘩そふな。大事にはなるまいか」と、上する女子下男、うろつく顔も青褪て、生た心地はなかりけり。毛剃一寸動きもせず、「ア、騒ぐまいく、此九右衛門が思案が有。彌平次残らず女郎衆の傍へ行け。跡はおれが受取た」手下「いや左様でない。我々が相手に成。親仁一人心元ない」九「ヤア此毛剃負取る男と思ふか。汝等が居ればやかましい。とつとへ行け」と睨め付れば、手下「そんなら行きます。親仁次第」と打連て、表の座敷へ

小女郎を此方へ云々！自分の方へ請出せば汝の小女郎との約束むだになる

息が云々！親の世話にならずと

ゐや！腰一片腰立て！仕懸るさま

駕籠に乗る云々！一語にて名句なり

出にける。小女郎は跡先知らず、惣七に引添ふて、二人の目元に氣を配る。九「コレ若い人惣七殿、此中の事一言いふても物が無いぞ。仰るな。此方共の商賣云はず共見られた通。何事も身が大事と思ふから、此中の事こらえさしやれ。否といわしりや事に成。ヤ

こらへさしやれ。小女郎を此方へ請出すと、此方の詞が反故になり、小女郎も可愛や、此方くと心中を立通し、女郎の口から金貸せと迄恥を捨ての心ざし、無にして遣らしや

るはソリヤいかひ邪見。悪い事はいふまい、此方の仲間へ這入らしやれ。小女郎も此方に添わせ、五十貫匁や百貫目の金は取換て、親御の息がかよらず共、物の見事に取立ませよ。仲間が多ふ成程此方は損なれど、運を力にする商賣、運弱ふては埒明ぬ。此中の

様な場を廻れた命冥加な運強い此方。九右衛門が力に成人と見て、コレ手を下る。仲間へ入て下され」と、詞は下てもるやい腰、否といはど切かけんづ、氣色面に見へ透いたり。惣七も手詰の返事、仲間へ入れば、家の大事命の仇。否といへば、小女郎を人手に渡す

のみならず、命迄とらるよ。何れの道にも死ぬる命。國法をや慎むべき、小女郎にや添ふべき、と二ツの心身一つに、定めかねてぞ居たりける。小申是惣七様、彼方の商賣は知らぬが、駕籠に乗る人、駕籠昇人、品は替れど行道は同じ事。金も取替へ、何から何

濡れて云々―戀
の爲破滅するは
誰も免れがたき
習
腕引て―腕を刺
して

一兩二兩云々―
一兩の包と二兩
の包各七百五十
兩其兩を兩方に
かく
あんらが在所―
當時の俗語、て
てうちは子供の

まで世話やかふとの心入。お身に悪い事でもなし、あつといふて仲間なに成、早う私わたしと起
臥かを、一所いっしょにしよとは思おぼさぬか。お爲たかにならぬ筋すぢならば、いやと返事へんじを云い切きらしやんせ。
此方こゝさんに添そはねば生いて居ゐる小女郎こわらうじやない。女房にようぼうに仕しなと殺ころしなと、否いやか應おうかが生死いっしょ
の、大事へんじの返事へんじで御座おんざんする。急せく事はないぞやと、懐なごころに手てを指さし入いれ、「チ、此汗このあせはい」
と、鼻紙はなみわり有ありたけ拭捨ふきすつる。濡ぬれで破やぶれる人の身みの、たしなみがたき道みちぞかし。惣七そうしちはつと打
領うなづき、「得心ごしん致いたした。只今ただいまより仲間なかまに成なり、お指圖さしづは背そむくまい。承うけり及およぶ長崎ながさきには物ものの堅かために
血酒飲ちゆうざけのひとや。偽いつはりでない惣七そうしちが心底しんてい、腕引うでひて誓ちかひを見みせん」と片肌脱かたはだぬけば、九くア、見み
ましたく。人にこそよれ何なにの此方こゝに偽いつはり有ありふ。改あらためて盃事さかづき。皆みな来きい〜」と呼集よびあつめ、
九く小女郎こわらう殿どの嬉うれしかろ。亭主ていしゆ身請みひの惣代そうだい金何程かねなんぢほぞ」四よ書付しよ是これに」と指出さしだす。追おつ取とてさらり
と讀よみ、九く小女郎こわらう殿どの共とも七人ななにんの身請みひ代金みひだい千四百五十兩せんしよびごな。端錢はしたが有あつてやかましい。五十兩ごじゆりやうは
亭主ていしゆに遣やる。千五百兩せんごひやうは受取うけとれ」と、一兩二兩いちりやうにりやうの七百五十しちひゃくごじゆ、
りやう目出度めだい仲間なかま入いり。皆みな兄弟あな弟にいよ
り他事たじなふなされ。歌うたへ〜」歌うたおんらが在所ざいしよは、奥山おくやまのてようちの、でんぐり〜
栗くりの木きの、木ねの根ねを枕まくらに轉ころ寐ね。此小女郎こわらう戀こひする山家やまがの、品物しなもので南無阿彌陀佛なまあいだぶつ、帶解おびいて
是御座これおんざれ。抱だて轉ころび寐ね、面おも白しろいぞ」と樂たのみける。町まちの夜番あやど慌忙あわて敷しく、「人ひとをあやめ、法はふを背そむ

チヨッ〜てん
ぐりはカイグリ
カイグリなり其
尾頭をとりて票
と續けたり
あやめ〜殺す事
いて菜〜ゆてた
菜

ぞく髪〜もぎ髪
が立つ
願れる〜罪の跡
見にとりなす

いた科人が、此廓へ入込だと、上の町から容改一人も客衆外へ出る事成ませぬ。捕
手の衆がはや爰へ」と云捨てよ、亭主を連て駈出る。動ぜぬ自慢の九右衛門始め、六七
人がぐんにやりく、俄に顔色いで菜の様に、しほくと「コリヤ堪らぬ。何卒舟へ行
道は外にないか、金の出るには構はぬ。土の底へは這入られず、天へ昇る梯子はないか。
隠義隱笠があら欲しや」と、我身一つを片付かねて慄ひ居る。惣七小女郎が手を取て、
門口に氣を配り、片唾を飲んで居る處に、内か隣かぐはたく〜。「捕たく〜」と喚く
聲。「なふ悲しや」と一同に、腰を抜して魂の、身に添ふたるはなかりける。亭主四郎
左立歸り、四ア、氣遣ひない〜。此博多の殿町で、飛脚殺して金取った奴、隣の堪屋で
捕へ、代官所へ引ました。此方の事ではない〜。」と、いへば一度に顔を見合、賊「ア、
有難い。ヤレ忝い。可惜肝を潰した」と、溜息ほつとついたるは、世並の悪い瘡癩に、
二番湯かけし如くなり。九長居は無益惣七殿、京へ上る。サア〜皆々往なふ〜。女
郎衆は駕籠で舟場迄「一口いふても八人が、亭主さらば」と立出る。四「七人一度に身受
とは、聞も及ばぬ大々臣。お獨びとり顔に書付張付度い」賊「ナフ礫と聞もぞよがみ。嫌
やく〜」四「お手柄のお名が顯れう」賊「顯れるは猶氣懸り。何にもいふな」と出て行、男

自慢は七人の、鼻に顯れ三重

中之卷

狩野一角やにか
百貫云々百貫
も驚いたのは編
笠一かいの代に
て留拂ふ、謠を
判用したる也
南京一交刑製の
黄き陶器、八匁
に鉢をかく
直打に云々一
打にすれば何匁
に成ると猫の鳴
聲とかく
五分と飛て云々
一算盤の一枚も
いて上るを飛ぶ
と云より時鳥と
續け其鳴聲を取
て本尊懸硯とい
へり

市たてよ、屋財家財の額寶、捨賣に相場なし。戸棚簞笥塗長持、燭臺椀家具吸物椀、組板佛壇、何や狩野の三幅對、表具計も百貫に、編笠提灯南京の、八匁から九匁を、鑄に見込の中脇指、鍋も釜も煉り鑪子も、疊も上て粗道具、寶の子の竹の小間道具、有とある物塵も灰も、猫も直打にやん匁、五分と飛んで時鳥、守本尊懸硯、鐵漿壺も罷出で、金になれとや口々に、付て糶る糶市に、町内騒ぎ三重やかましし。家主菱屋嘉右衛門、興覺め顔にて駈來り、「是はく狼藉千萬何事じや。此家は我等が貸し家。主は小町屋惣七といふ西國商人、夫婦連で十日計の逗留で大坂へ下る。跡にはあの婆々たつた一人。留守の事はお家主頼ますといひ置、今日か明日は戻られふ。お姥もお姥、留守居とは何の爲。是親仁、先わごりよは誰なれば、能い年をして京の町の作法知らぬか。町所へも斷りなく、人の留守に踏込、疊迄賣拂ひ、捌はなんとする事。此心清町一町のたばねをする年寄、則家主、うつかりと見ていよか。乳母も一所に詮義する。隣が町

の會所、サアく歩びや」と、喚け共姥は涙に顔傾け、親惣左衛門手を束ね、「お家主と申お年寄、御尤々々。我等は惣七めが爺、小町屋惣左衛門と申て生國は長崎、廿ヶ年このかたかゝるたきよせういた以來上方居住致せ共、資本なければ商賣もはかどらず。山科邊に逼塞致し、古郷力に惣七めが西國通ひいたせ共、仕合したとの便りもなく、如何か斯うかと思ひ暮す折節、端しぐ人の取沙汰、小町屋の惣七は、西國で大きに儲け、博多の傾城請出し、心清町このかたかゝるたきよせういたに檜木作、節なしの見世を張り、風躰は無人の暮でも、内證の榮耀は千貫目持、と噂する程心得難く、夜前始めて尋参り、沙汰に違はぬ内の諸道具、代物に吃驚いたし、姥めに向ふても委しき様子は知らぬと申。各も商人、我等も七十八迄商で食た者。胴返しの利なればとて、儲けるには法圖が有。僅か十兩十五兩儲けてさへ、吹聴して悦ばせししやうぢきかうくた正直孝行な惣七め、一人の親に隠すからは、碌な銀とは存せぬ。後に募つてお町内、お家主へも難義をかけ、其身も人竝の死をせぬ奴。今斯う致すも親の慈悲。邪の銀は身につかぬと申事、骨身に沁て思ひ知らせ、憂しほ踏んで正道の、商に取付心つけん爲、俄に道具屋へ走やら、古鐵買を呼やら、心急いてお町内へ無禮。お家主へ付届け申さぬは、眞平々々。幾重にもお佗言。貸屋札出して下されませ。お家は明ますく」

家請一家を借る
に於いての保證
人
紙一神にかゝ

心づくし一筑紫
に心配の事を上
す

閑古鳥一淋しき
也又泣くの縁
足の底云々一諺
に塵に疵持て從
原歩かれずの意

計にて、下るはきんか頭なり。嘉御親父の云分承届けた。去ながら、惣七殿には口合家請も有仁。後日の念に御親父の一札、留守居の姥も判を取。サア會所へ同道、いざ御座れ」と、門の戸はたと引立て、天の岩戸にあらね共、此處にも紙の貸屋札、残らぬ千早古道具、明屋とこそ成にけれ。博多小女郎は町風に、剛し夫の惣七が、あぶなき分限波の上、何百里共知らぬ火の、心づくしを過し身は、京大坂は隣にて、夫婦打連れ歸りしが、暖簾はづし大戸をしめて、墨黒に貸屋札。鴛こりや如何じや。ハツく」といふより詞なく、潜戸押明入たるに、湯水を飲まん鍋釜も、疊も擧て閑古鳥、泣にも泣れず興さめ果、口を明たる計なり。惣七心は足の裏の疵にこたゆる小笹原、簀の子にどうと座しければ、小女郎せいて、「是申、緩りとして居さんす處で有まい。念比にする家主殿、内義様」と私共親しうて、先度下る時にも、土産に大坂の三好下駄頼びぞやおしやんした。それ程他事ない中で、譯の悪い仕方。わしや急度詰開かふ」と、走出るを、惣七是々、女子のいふて濟ぬ事。貸屋といふは名計、破れ家を手前普請、根板も追付張る筈で、板も買置。屋賃といへば二ヶ月三が月先へは遣れど滞ほらず。町義付合愚も無き身。家財迄取られ、姥が行衛も知れぬは、如何でも下の沙汰でなし。方々に預置し金銀荷物

お笑止も氣の
罨

水臭き一癖耳に
水とかけて水臭
い奉公は馬鹿ら
しいとなり

木の空一疎

あけてーあけて
か

に就ての事か。何れの道でも命有中、一夜も爰では明されず。エ、是非に及ぬ、惣七が
運も是迄、こりや女子共、男共、見る通の仕合、力にかなはぬ。主従の縁も是限り。大
坂の遣ひ余り、一步駒金少々あり。三人寄て分て取れ。隙を遣る、さらばく「金更紗の
財布共に投出せば、下女共、お笑止共なん共、お辭義申もお慮外。又の御縁」と口上を、捻
つて見れば手にさわる、一步小判も八九兩。はつと癖耳に水臭き、半季一季の名残なく、
連立表に出にけり。物音隣へ聞ゆれば、姥が會所を脱て来て、「なふおとましやく。昨
日の晩から親父様がお出なされ、中々でもない事。淺ましい欲心に海賊の仲間に入、道
に違ふた銀儲けを結構な事と思ひ居る。木の空に引張らるゝは今の事。菜大根肩に置いて
も、正道な儲けは三文でも身に付と、云聞せた詞反古にして、何んで出来た屋財家財。是
が我子の敵じや、とおいとしほや、涙片手に道具屋集め、二足三文に賣捨、家もあけて
其上に、隣の會所で町衆の前に畏、何やら斷りいふたり、皆お前ゆへの御苦勞」と、涙
ぐめば涙ぐみ、鴛これ姥、懸硯に入置し割符の手形、是かあれば一大事。入物共に道具
屋の手へ渡つたか「鱈いやく懸硯は賣れたれ共、其割符は残して親父様の鼻紙入に納
てじや。そんな事氣遣ひせず、早う町をのけましたい。ハア會所から呼そうな。姥はも

う往きます。命あらば御縁次第。お二人共に御無事でや」と、歸るご是も名残成。茫然として惣七、「親父の耳へ入からは、世上に知れたに極つた。四日市には思ひ寄方も有。伊勢路へ向て遁るゝたけは遁れて見ん。もう七ツに下つた。サア用意」といふ處に、「惣七宿にか。早い門のさし様」と、潛戸を明て突と入ルは毛剃九右衛門。惣七狼狽へ、「ヤ珍しい、何と思ふて。先々是へ」と、「煙草盆持て來い、茶持て來いよ」といふ程。九右衛門胡散顔、「黙りやく惣七。大坂で逢ふたは四五日前。追付上る、京で逢ふといひ合せ、こりや宿替と見へた。何とした仕だらで何方へ立退やる。氣遣ひなり」といひければ、鴛イヤ／＼氣遣な事でない。たつた今上つてまだ洗足もつかはず。老躰の親別住るも異な物、と一所につほむ談合で、諸道具を引やら、取込んだ最中。旅宿は何處ぞ、其中此方から便宜せう。休んで行きや」と出んとす。九「待ちやく／＼。ハテきよろ／＼と女夫ながら飲込まぬ素振。是やがて商賣時分。此方も明日國へ下る。仲間中から預た島の割符受取に來た。其割符を渡して行きや」鴛ヲ、如何にも／＼、其割符は大事にかけ、箱に入。封を付、親父に預た。追付是から持せて遣らふ」と、いふより九右衛門色を變へ、「三千里を股にかける此仲間。命代の割符を親父に預けたとは何處へ。味い事いふな

つぼむーちんま
りと暮す

魚と水—情交親
密なる事、劉備
孔明の故事

反を打つ—抜く
身稱す

しのべ竹—葉細
く節長き竹

捨る—前後に意
を持たず

いふな。仲間を脱て一人儲けしようでな。音沙汰なしの俄宿替へと、てうど算盤が合ふた。此割符は其肌そのはだに付て居る知れた事。受取て見せう」と、大戸、潜戸の鑰根、掟としめて伸し上れば、小女郎慌て、「これ九右衛門様、魚と水との仲間、なんの嘘が御座んしよ。此割符は二三日中、私が急度渡しましよ。先歸つて下さんせ」と、押出す腕むすと取、「エ、面倒な」と簀子にどうと投付る。惣、卑怯な、女を痛めず共、いふ事は身にいへ」と、脇指に手をかくれば、ウヤ反を打て威ても、割符を取らずに置ふか」と、ずはと抜けば惣七も、飛退去て抜合せ、兩方腕は狂はね共、繩目も弱い古簀子、まばら朽たるしのべ竹、踏込む足を踏とめて、右へ拂へば左へかぶり、左を切れば右を踏込み、打合ふ切先春の日に、解け行く氷踏む如く、小女郎は中に身を捨る、掃溜の鐵藩、持て開いて相手の刃物、打落さんと立廻る。裾を簀の子にしがらみて、かつぱと轉ぶ頭の上、閃く刃ぞ三重危けれ。あたり隣に聞付ても、恐れて態と知らぬ顔。堪り兼て惣左衛門、何をいふも子の可愛さ。「割符を渡す怪我すな」と、表へ廻る門の戸を、押せど叩けど明々にこそ。根の穴から覗いては、「ハア、く悲しやあぶなや」と、もがいて裏へ駈廻る。内には小女郎、障子を外し中の楯、相手の刃物を押へんと、前に塞り後に開き、隙間を見

がはと踏込―障子の中に足をふみ入る

聊爾―粗忽

あら―あらずに
かく

て打付る。足踏ためず、障子を我身に負ながら、どうと伏せば九右衛門、透さずかよる片足をがはと踏込み、小女郎が上に重り伏し、障子越に突んとす。「突たらおのれ一打」と、上に晃く惣七が切先、危き中の危さなり。親は憧れ隣の壁、打毀ちく、手の出る程に壁下地引破り、割符を出し閃かす。親の手つきの物云ふ計。惣七きつと見付、「ヤイ九右衛門聊爾すな。割符渡す云分あるまい。此方もさす、サアさせ」と、鞘に納めて眼前に、助かる命も親の慈悲、と手共に取て押戴きく、惣七は是々慥に受取れ」と、渡せばとつくと見届、丸ム、別條ない受取た。是惣七、互に命がけの身過。魂を研く仲間の法。切結んだ劔の下から陸まじく成も魂、遺恨は残らぬ。氣苦勞の有顔色じや。山が崩れかかつても、狼狽へぬ心持ねば此商賣はならぬ事。いつもの時分に又下りや。國で逢ふと暇請ひ、出て行こそ臆太けれ。惣七、小女郎を引起し、「今のを見てか。忝い親の慈悲。此壁の頰れをせめて拜みや」と、泣ければ、少ア、有難い御恩徳。慈悲心を受ながら、壁一重彼方の舅御の御面躰、見る事も叶はぬか。ハア、息切れて物いはれぬ。水でも湯でも」と苦しめ共、茶碗一ツ杓一本、あら氣毒なんとしよ、といふ聲隣に響入、茶碗に温湯壁越しに、情の親の手つきを見て、「ハア、冥加ない有難い」と夫婦わつと泣出し、

生身には云々
生あるものには

茶碗に縋り手に縋り、「お盃共、藥共、氏神の御神酒共、此上の有べきか」と、二人戴き
飲交し、少申御手は取れ共お顔は知らぬ。私はお許しなけれどお前の嫁。何卒御機嫌直
して惣七様共詞をかはし、一期の見始見納めに、お顔を拜ませ下され」と、舅の手を我
顔に、押當々々泣涙、親の歎きもあらはれて、腕慄ふぞ哀成。盡せぬ涙の手を振放し、
銀財布一ツ投出し、舅「早う出て往け」と、いはぬ計に門の方、教ゆる手さへ引入るれ
ば、小女今は親よ舅よ、と便り名残もきれたるか」と、又絶入て泣けるが、舅「ナフ不孝
至極の惣七に是程のお慈悲。路銀迄下さるとお心、背くは猶不孝」と、財布を女夫が戴
き戴き、「はや人顔も見へまい。これが本の名残じや」と、互に身用意裙引上げ、泣く
泣く表に出けるが、隣の門を遙に見入、舅「ヤレ姥、只一目親父様を小女郎に見せてくれ。
路銀のお禮も中度い」と、小聲にいふも聞付て、姥が出れば惣左衛門、「こりや姥、何を
とほくする。今の銀は隣の道具賣つた金、直に隣へ投込んだ。禮受る筈がない。惣左
衛門が子共には商ひこそ訓へたれ、非道の身過する子は持ぬ。淺ましや不便や。天道も
日月も、神も佛も罰も當はなされねど、此方から罰の下へ當りに往くとは知らぬかや。
生身には餌食あり、人間一人生るれば、乳房といふ天道の御扶持方、正道の家職勤むれ

天必ず食を既へ

分量一程

戀と小袖云々
 著心もよくの尾
 韻を受けて能々
 と締りたるにて
 夫婦仲睦じけれ
 ども能々世間に
 捨られたと也
 粟田口一逢ふに
 かく

關寺一急にか

ば、分限相應々々の、天の乳房が備はる。正道にない金儲け、榮耀する様なれど、天道の乳首に放れ、三界の捨子と成、野倒死するは幾人か。猫は火燵に寢臥する、犬は土邊で物喰へど、火燵な猫の眞似せぬは、身の分量を知たるゆへ。畜類に劣つた身の程知らず、成れの果を思はれ、不便さに腹が立はいや」と、包みかねたる涙なり。「ヤイ惣左衛門が子に成たくば、手鋸提ても正道に、淺ましき死をせぬ様に、命全ふ何卒親を先に立、惣左衛門が葬禮に喪服を著て供して見せ。其時は我子じや、と棺の中から悦ぶ。早ふ失ふ」と計にて、わつと泣入泣聲の、耳に残るを形身にて、別れ行くこそ三重

下之卷 惣七小女郎道行

戀と小袖は一模様、身に引締て合ふてこそ、寢心もよく著心もよく、能々見限り果られて、追出されし我宿の、あたりに顔を見られじと、戸口も店も明やらぬ、星も夜深き親の恩、重ねて著たる其時は、いとど心も輕かりし。今朝肌薄く行道は、肩背苦しき身の行る。心柄とはいひながら、情名染の京の町、三條小橋で知る人に、粟田口かと思ひしも、先へ心の關寺に、身の衰への恥しき、今の小町屋惣七は、博多小女郎がならした

け、關寺小町を寄
せたり
ならし竹一馴れ
るにかけ甲斐絹
に回思をかけた
それに逢はれぬ
事
黒彌子一苦勞に
かく

方様云々一惣七
ならで頼む人な
しぬ
ぬめ一統と要に
かく

そこせい一氣を
附け

け、何時も心に懸て置、歌親の甲斐絹に綾錦、惣「最早都を見ん事も、又と成まい限り」といへば、共に泣くく憂き黒縹子の、糸の切れざる辨柄島の、小「愚痴なさらく左様ではないに、羅紗もない事云しや綸子な。先へ行子に尋れば、抜け參宮の頭字が耳に留まる神心、守り給へ」と再拜の、袖に神樂の鈴鹿山、八十瀬の川に濡れ初し、惣「おれと和女が初戀に、二世も三世も變らじと、登り冷泉詰たる坂の下、今零落の身と知らば、ざつと淺黄に染ふ物。裏表ない心から、偽紫の色惡ふ、憔悴顔見る悲しや」と、絞る袂の涙の露、野邊の草葉も色つきぬ。泣て心を亂せとか。方様ならで、歌頼む博多の小女郎がなくば、世帯の花も縮縮と、こんな姿にせまい物。ぬめ幻の此世から、未來くと夫婦ぞと、縫付てぞ泣居たる。歌關のお地藏は、親よりましと聞なれど、優らぬ此世の舅御の、機嫌直して給はれと、頼みを直に救ひ乗せ、共に助かる駕籠昇の、「駕籠遣ませふ」と歩み來る。惣「尾張へ行者。先の宿迄駕籠賃幾許」カゴ「石薬師迄は、道は二里有駕籠賃ころり」惣「ころりは知らぬ」カゴ「知らずは錢百」惣「それは高い」カゴ「負て行ましよ」惣「七十く」二人「能いは負けた」と駕籠下す。道は一筋駕籠二挺、二人思ひを抱乗て、打見るよりは肩重く、甲「小川じや」乙「そこせい」甲「かたせい」乙「まっかせ」杖突坂、小谷大谷打過て、

肩せい一肩かへ

日影も我も行空の、末果しなき旅衣、昨日今日とは思へ共、都を出て日數さへ、四日市にも程近き、追分にこそ三重著にける。

正しかれと心中に、頼みをかけし辻占の、駕籠舁が詞のはづれ、惣七が胸に應へ、かよ

らぬ繩に氣を縛られ、向ふの人は下るれ共、我心から身を縮め、下りもやらず、惣コレ

小女郎、先和女から乗換へて先へ行きや」小そんならお先へ参ります」惣「四日市とやら

で待て居よ」小駕籠の衆早う連れましてや」と、おりの駕籠の河合村。小女郎は何の

氣もつかず、駕籠に任せて乗換へ行。石薬師から來る駕籠の者聲かけて、「女中の連衆乗

せた駕籠は是か。うちも聞た駕籠換よい」おつと幸、サア立てい。旦那殿換へますべし。

おりて下され」と、駕籠の簾を打上る。相手は駕籠をハヤ下て、提けたる風呂敷包、身

軽い出立の袷股引、牙籤脚絆に身を堅め、腰に早繩見るからぞつと、惣七が余所見る顔

は我顔を見せじと忍ぶ頬冠り。心早に下り立て、「駕籠の衆太義」と駕換ゆる。駕籠の

簾我手に取て引下し、惣急ぎの者じや増やらふ。サア遣た」といふ聲は、人の耳にも慄

ひけり。捕手、小町屋惣七捕た」と聲を打かける。駕籠により苧の細引綱、中には是はとあが

け共、翼なければ飛れもせぬ、駕籠の鳥かや惣七は、中に音を泣計なり。豫て相圖のこ

より苧一綱を張るは罪人を逃がさぬためこや一道傍の小屋か

うちも客の泊る宿
さあ立て一駕籠を立てよ

じかつないー苦
痛に堪へぬ

やの者、十手引提げくるくと追取巻き、「咎は心に覺えがあらふ。其方共に仲間八人と分明の仰を請、我々捕に向ふたり。尋常に召捕らるよか。踏付て繩かけふか」と、いへ共念佛の聲の外、何の答へもあらざれば、役人爰は途中、次の宿まで此儘連行、繩かけて國へ引け。それ駕籠遣れ」カヨ「心得ました。逆も遁れぬ命じやに、爰で繩をかよらいで」と、泣きく立寄て、駕籠昇上れば、がばくと、駕籠から漏て流るゝ血は、大地に毛氈引如く、乗手はうんく喚くにぞ、「やれ駕籠の内て自害した。出合くと駕籠投捨、恐れて側へ寄附す。役の者共立懸り、網引除け、簾上ればこは如何に、一尺五寸切刃際迄突込で、刃先は弓手の脇腹に。虫の息、眼はぎろく。惘れて詮方なかりけり。斯る處へ小女郎が、身にもかよつた縛繩、引れて來る身の悲しさより、此有様を見る悲しさ。流れし血汐を踏しだき、駕籠の内へ顔さし入、小女郎が來ました。私も今縛られた、繩かよりましたぞや。昨夜迄も一ツ枕に起臥て、一所と契りかはしたに、此方様一人が先立て、存命へ物を思へとか。苦しふ御座ろ、じゆつないか」と、いふも涙に搔暮て、前後も覺へず泣居たり。惣七苦しき目を見ひらき、「ヲ、繩かよつたか小女郎。國法を破り親に不孝の大悪人、廣い世界に狭められ、土地の住居もならぬ様に身を持なし、落付方なく、あ

天の綱—原本天のまゝ

命のから—命の障り
人は互—人は相見互の懸

てどなく、此處迄迷ひ来て、天の綱、地の繩に搦められし此惣七。古郷へ引れ死罪に遣はど、一門の頬に血を注ぎ、親へは不孝の上塗、と思ひ定ての自害。毛剃九右衛門が海賊に組し、今迄身に纏ひし縋子縮緬、和女に著せた綾錦の冥加に盡き、孤被る身に成果た。夫につるよ習ひ逆、和女迄繩をかけ、名を流させ、憂目を見するは、我一心より事起る。此惣七がなかりせば、今の憂い目は見せまい物。不便や、嘸悲しかる。長くも添はぬ物ゆへに、命のかい迄なしたよな。許してたもれ小女郎」と、いふ聲もはや息切れし、頼み少く見へにける。鋭く見ゆる取手共、獄屋へ渡しては叶はぬ事。人は互、兩方名残惜ませよ」と、了簡するこそ優しけれ。聞ば聞程猶悲しく、小其起りは誰が爲すぞ。小女郎を人手に渡すまいとの御心から、親御に換へ、命に換へ、女房に持て下されし。それ程私が可愛ひか。冥加ない共忝ない共、お前に禮をいふ詞。日本は愚の事、唐天竺にもよも有まい。此手が自由に成ならば、拜んで死度ふ御座んす」と、夫の膝に顔さし寄せ、消入絶入、咽せ返れば、惣「此世で逢ふは今計。來世もかはらぬ女夫ぞや。南無阿彌陀佛、彌陀佛」の、聲もかすかに脇指ぐつと、抜くより早く息絶へたり。小女郎わつと聲を上、「待て下され連立度い。遅いか疾いか殺さるよ我命。皆様お慈悲に今爰で、

檢非違使—今の
警視の如きもの

當今—今上皇帝

今が博多—今は
羽片に通はせた

殺して下され殺して」と、狂ひ戦き駈廻る。斯る處へ檢非違使の某眞先立、爰彼處にて召取たる海賊原、傾城交り繩付共、一度に彼處へ引來る。檢非違使一札押開き、「召人共に申聞する趣、有難くも承れ。一、沖がかりの大船に通路を求め、波を潛り、水底を抜け、船へ近付、諸色を奪取し事、國法を背く大罪。武士に仰て死罪有べき所、當今御即位の御悦びによつて、死罪一同を勅免成」と、聞も果す繩付共、蘇生たる心地して、一度にあつとぞ勇みける。重て傾城共に打向ひ、「汝等は流れの身。彼奴等に添ふは勤の習ひ、料にあらず。行先迎も構なし。繩を許せ」と有ければ、畏て雜色共、立寄り解く繩の跡、吹擦り撫擦り、女郎王様の意氣方は又格別な物じやないか。此手が自由に成たれば、廓の門を出た様な」と、笑ひ悦ぶ其中に、小女郎は始終しくく涙、留め兼たる顔振上、「つれ合の惣七殿、斯るお慈悲を待受ず、私を捨、此世彼世へ飛去て、比翼の鳥の片翼、今が博多の此小女郎、生て甲斐なき命ぞや。お慈悲に殺してたべのふ」と、聲も惜まず泣居たる。「ヲ、尤く、夫惣七同類とはいひながら、色に迷ひし若氣の至り、罪の輕重明白たり。自害せしは其身の不祥。汝夫に成かはり、親惣左衛門に孝行盡し、後世を弔ひ得さすべし。勅に任せ、彼奴原それ追拂へ。重て惡事を止灸の、顔に燒鐵入り

血みどろ云々
血まみれ血だら
け

墨ぼくろ、耳殺みこそく、鼻はなく、ちみどろちんがい追拂おっはらふ。
隣國りんこく他國たこく幾萬人いくまんじん、博多小女郎ものがたりが物語ものがたり、語かたる

も聞きも後代こうだいの、永ながき噂うはさを殘のこしけり。